

## ヤマタノオロチ斐伊川の古地理を探る

島根県立三瓶自然館 中村 唯史

島根県東部を流れる斐伊川は、頻繁に氾濫を繰り返した暴れ川として知られ、その治水は地域における重要な課題であり難題であった。出雲神話にみられるヤマタノオロチ伝説は斐伊川の治水がモチーフになったと言われるほどである。

本研究の調査地は、雲南市木次町と仁多町にまたがる地域である。尾原ダム建設工事に伴って埋蔵文化財の発掘調査が継続的に実施されており、島根県教育委員会の協力により、現地調査と考古資料に基づく検討を行い、河川堆積物の堆積学的検討および、そこに含まれる考古遺物・遺構から得られる年代から、過去の河川状況の解析を試みた。その結果、次の結果が得られた。

①この地点における過去2500年間の河川侵食量（下刻量）は、0.5～0.8m／1000年。

②少なくとも2000年前頃までは比較のおだやかな河川であったが、中世以降は河川状況が大きく変化した。

斐伊川が氾濫を繰り返した最大の要因として、中世以降に流域で盛んに行われた製鉄に伴う開発が大きく影響していることが従来より指摘されている。氾濫によって流出した土砂は下流域に厚く堆積しているため、古代以前の斐伊川の河川状況や平野部の環境はこれまでほとんどわかっていなかった。しかし、最近になって出雲平野で青木遺跡（出雲市）など重要な弥生遺跡の存在が明らかになり、当時は比較のおだやかな「普通の川」であったことが推定されるようになっている。このことと、本研究で明らかになった中流域での河川状況の変化は調和的である。この成果は、人的開発が進む以前の状況と、その結果として生じた現象の一部を示している。現在の自然環境は、一部の例外を除いて人が大きく関わりながら成り立っているものであり、その変遷を探ることは自然史解明の基礎的資料であるとともに、自然環境の将来予測においても重要である。具体的な例として、例えば海岸侵食と土砂収支の問題に関わりが深い。なお、調査地における発掘調査は継続的に行われており、今後、より多くのデータが得られる見通しである。